

E・S・モース関連資料と根岸家

根岸家における E・S・モース関連資料と学術的交流に関する考察

2016

山下祐樹
(熊谷市立江南文化財センター)

熊谷市文化遺産保存事業実行委員会・文化遺産研究会

E・S・モース関連資料と根岸家

根岸家における E・S・モース関連資料と学術的交流に関する考察

E. S. Morse related historical sources and Negishi-family
Consideration about Morse's related history and academic exchange in Negishi-family

2016

山下祐樹
(熊谷市立江南文化財センター)

Yuki YAMASHITA

熊谷市文化遺産保存事業実行委員会・文化遺産研究会

E・S・モース関連資料と根岸家

根岸家における E・S・モース関連資料と学術的交流に関する考察

目 次

第1節 「E・S・モース関連資料」について . . . 4

第2節 モース関連資料と根岸家における学術的交流 . . . 10

《参考文献・出典資料》

第1節 「E・S・モース関連資料」について

概要

大森貝塚の発見で著名なエドワード・シルベスター・モースは、明治12年と明治15年の2回、好古家の根岸武香に面会するために青山を訪れている。その際に渡されたモースの名刺を所収した「人名録」に貼付されているE.S.モース及びW.S.ビゲロー名刺及び、武香からモースに土器片を寄贈し、それに対する「感謝状」及び関連資料、根岸家が所蔵する土器などをモチーフに、モース自身が描いた絵画が保存されている。これらの関連資料は根岸家とモースの関係を示すと共に、近代日本における学術的交流が熊谷の地でなされたことを明らかにする貴重な歴史資料として評価できる。2015年11月27日、熊谷市指定文化財に指定された。

概要

熊谷市指定文化財「E・S・モース関連資料」

種別	名称	所在地	所有者・管理者
有形文化財 (歴史資料)	E・S・モース関連資料 (絵画1点・文書類3点)	熊谷市青山152	根岸友憲 (埼玉県立文書館寄託)

「E・S・モース関連資料」

概要

- ①名称 E・S・モース関連資料 (絵画1点・文書類3点)
- ②種別・種類 有形文化財・歴史資料
- ③所在地
 - ・埼玉県立文書館 (文書類3点「根岸家文書」として寄託)
 - ・根岸家 (絵画1点)
- ④所有者 根岸友憲 (熊谷市青山152)
- ⑤構成資料
 - ・E.S.モース直筆画
 - ・E.S.モース及びW.S.ビゲロー名刺
 - ・E.S.モースによる根岸家への感謝状
 - ・感謝状関連資料 (名刺以下3点は根岸家文書からの抽出指定)

① E.S.モース直筆画



紙本水彩

(マット内側一部封入、額装部分に貼付) 絵画サイズ (額装含む) : 縦 52cm・横 136cm

(マット内側サイズ : 縦 36cm・横 101cm) (表現部分サイズ《絵画・サイン部分》: 縦 32cm・横 90cm)

: 額装の開封が不可能であるため紙本全体のサイズ不明 所有管理 : 根岸友憲氏

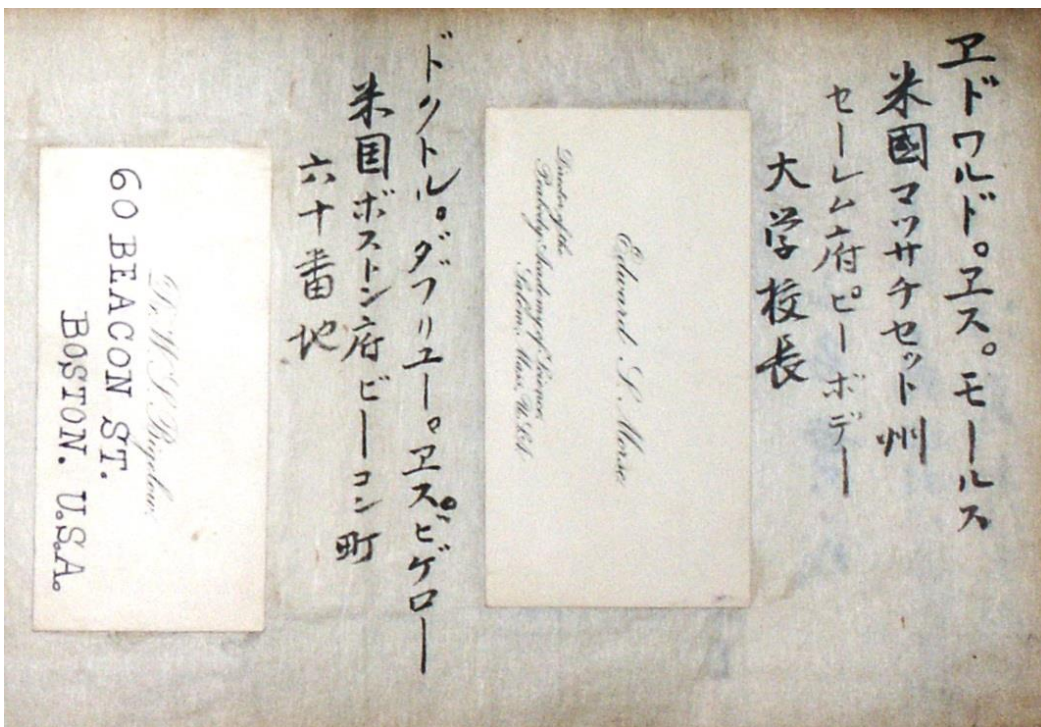
図面左下に筆記
Edw. S. Morse
at mr negishis house
at Kabutoyama
Oct 8. 1882

この直筆画は、記録から明治15年(1882)10月に、モースが根岸宅を訪問した際にモースによって描かれたものであると推察される。この際の渡航記録については定かではないが、年譜に示される第3回目の来日時に再び青山村を訪れたことを示す資料である。

モースは『日本その日その日』("Japan day by day" 1917)や、『日本人の住まい』(Edward Sylvester Morse Japanese Homes and Their Surroundings 1886)などにおいて、素描画や水彩画、鉛筆画の挿絵を多く描いており、絵画の創作者としての一面も見せている。この直筆画については墨や黒の彩色のような色感によって、根岸家所蔵の好古資料や陶器類をスケッチしたものである。

画面上には、縄文土器釣手形土器、縄文土器深鉢(加曾利B式土器)、縄文土器浅鉢、打製石斧、磨製石斧、坏(つき)、須恵器長頸壺、須恵器長脚壺、勾玉、石棒、須恵器提瓶、近世陶磁器、火縄銃、太刀、杓立て、花入れ、風炉釜、伊万里茶碗などと推定される土器等が描かれている。

② E.S.モース及びW.S.ビゲロー名刺



モース名刺 10・2センチ×5センチ

ビゲロー名刺 9・8センチ×3・8センチ

人名録に貼付。各説明書きが併記。

(根岸友憲氏所有：根岸家文書 埼玉県文書館寄託)

モース名刺

Edward S. Morse

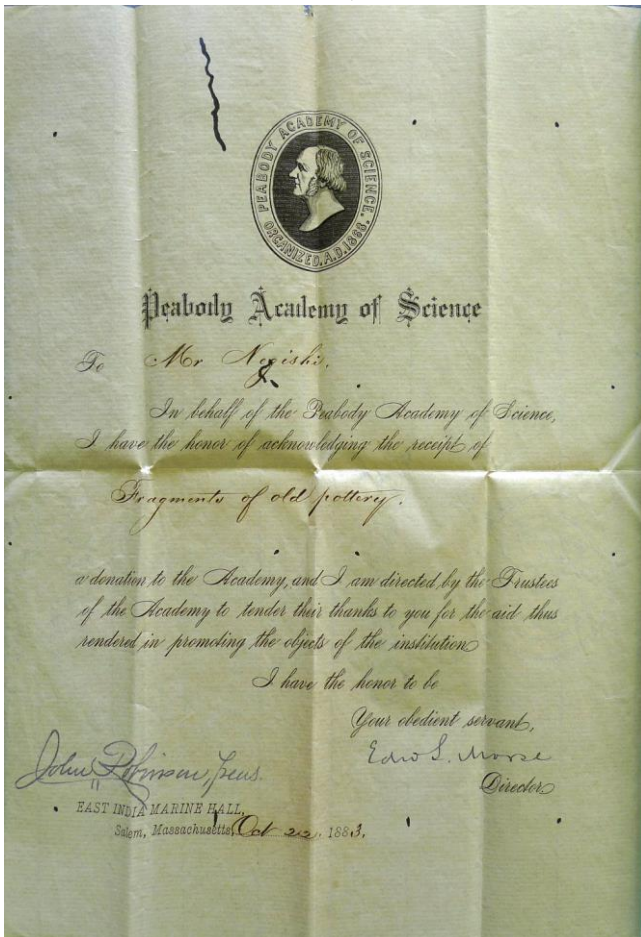
Director of the Peabody Academy of Science

Salem, Massachusetts

ビゲロー名刺
Dr. W. S. Bigelow
60 BEACON ST.
BOSTON. U.S.A

明治12年(1879)8月、モースと日本美術研究者のウィリアム・スタージス・ビゲロー(William Sturgis Bigelow)の青山村への来村に際して、ビゲローから根岸武香に手渡された名刺が、本資料として認められるものである。その際、モースからの名刺の手渡しがあったことが推察されるが、人名録に残されているモースの名刺については、文面に「Director of the Peabody Academy of Science Salem, Massachusetts」(ピーボディー科学アカデミー館長)と記されている。モースが館長となるのは、この来訪の翌年の1880年であることから、モースの名刺については直筆面を残した明治15年(1882)に手渡されたものであることが推定される。人名録の整理の際に、両名刺が添付され、それぞれの説明が併記されたものである。

③ E.S.モースによる根岸家への感謝状



(根岸友憲氏所有：根岸家文書：埼玉県文書館寄託)

概要

Peabody Academy of Science

To Mr.Negishi

In behalf of the Peabody Academy of Science

I have the honor of acknowledging the receipt of fragment of old pottery.

A donation to the Academy and I am directed by the trustees of the Academy to tender their thanks to you for the aid thus rendered in promoting the objects of institution.

I have the honor to be your obedient servant.

Edward.S.Morse
Director

John Robinson, pens
EAST INDIA MARINE HALL
Salem, Massachusetts, Oct 22 1883

翻訳文

ピーボディー科学アカデミー

根岸様

ピーボディー科学アカデミーのために

私は古い陶器類の断片を受領することができ、有り難く感じている。
アカデミーと私への寄贈は、組織の目的遂行のために意味を成す援助であることから、アカデミーの評議員により、これらに対する感謝状をあなたに提供するよう指示が出されている。

私は、あなたに対しその報告をすることができ、光栄である。

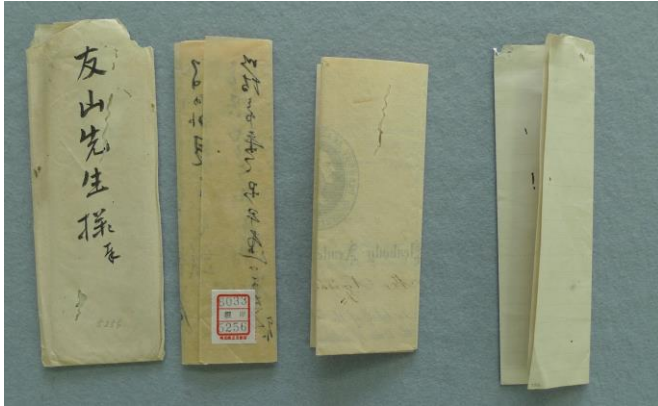
エドワード.S.モース
館長

ジョン・ロビンソン 筆
東インド海運ホール
セーラム、マサチューセッツ、1883年10月22日

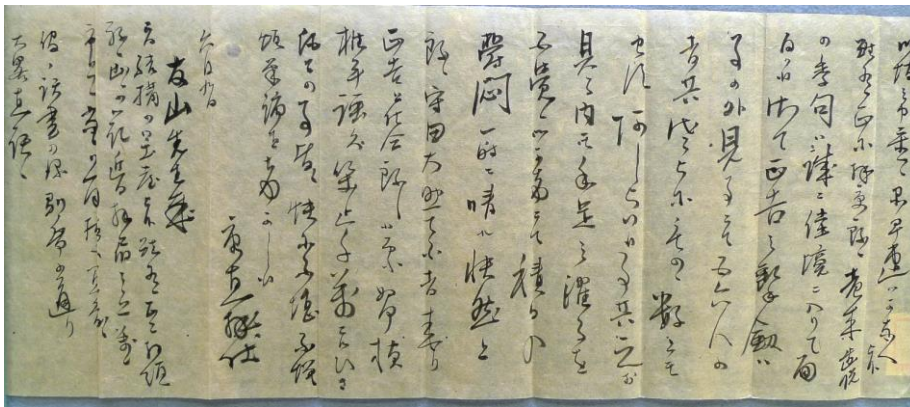
この感謝状は1883年10月22日の紀年銘が示され、印字にて作成されており、末尾の部分にエドワード.S.モースと、当時のアカデミー評議員、研究教授を務めていたジョン・ロビンソンの直筆サインが残されている。この書状の意は、モースが根岸家への来訪時に、根岸武香からモースへ寄贈された陶器類に対する感謝の念が含まれている。モースは日本国内の工芸品や考古資料、民俗資料等への関心が高く、多くの収集を進めた。それらは「モース・コレクション」と称されている。後にピーボディー科学アカデミーやアメリカの大学機関にて收藏され、日本美術への研究資料として高く評価されている。根岸家からの寄贈資料もモース・コレクションの一部に含まれており、ピーボディー科学アカデミーから現在のピーボディー・エセックス博物館へと名称を変えた研究機関にて收藏された。なお、モースは、収集資料の整理報告その成果を『モース日本陶器コレクション目録』(Catalogue of the Morse Collection

of Japanese Pottery) としてまとめており、現在、そこに掲載された陶器の全5千点はボストン美術館が購入し保存されている。この資料の中にも、根岸家の寄贈品が含まれていると考えられる。

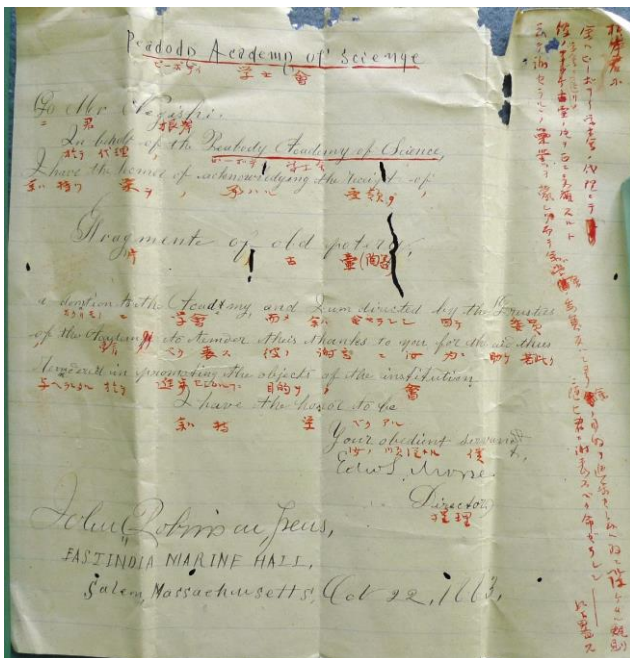
④ 感謝状関連資料



資料4点（封筒・書簡・感謝状本文：前掲・解説文）



書簡



読み下しの訳文

(根岸友憲氏所有：根岸家文書 埼玉県文書館寄託)

1883年10月22日に記された感謝状がピーボディー科学アカデミーから根岸家のもとに届けられた。その後、根岸武香の父、友山はその内容の精査のために当時では限られた英文解読者の妻沼の鈴木方(康直)氏に翻訳を依頼した。その返送された文書類が本資料である。書簡の文書は、神刀流の創始者である日比野正吉の撃剣についての内容が主要部を占め、英文翻訳に関わる内容は末尾に用件として示されるに留まっている。同封された文書には上記感謝状及びその読み下し文が含まれている。アメリカから送付された文書を熊谷地域の人々がいかにして理解しようとしたか、その様子を伝える資料である。

補足)

根岸家文書について

熊谷市指定有形文化財・古文書

「根岸家文書」

(指定年月日 平成18年2月28日)

(1) 種別・種類

有形文化財・古文書

(2) 員数

5, 193点(埼玉県立文書館寄託文書一括)

(3) 年代

近世から明治・大正期

(4) 所在地・所有者

熊谷市青山152番地・根岸友憲

(5) 概要

根岸家文書は、大別して江戸時代の村方文書、明治初年の戸長役場関係文書、明治・大正期の同家の土地経営関係文書の3群に分けることができる。村方文書については、同家が積極的な活動を行った商業、金融関係の文書が非常に多く、村政関係の文書では荒川、和田吉野川をめぐる用水や治水問題に関するものが中心となる。明治以降のものについては、同家の土地経営を物語る文書もさることながら、根岸武香による考古学の足跡を示す吉見百穴発掘資料やその保存活動に関する史料も含まれている。本文書は、近世以降の関東農村に発展していた豪農の成立と経営を物語る豊富な内容の古文書を含み、更に近代の歴史学、考古学の黎明期を知ることのできる史料として、貴重な文書群であるといえる。保存状態も良好である。

第2節 モース関連資料と根岸家における学術的交流

モースの経歴と日本考古学への寄与

エドワード・シルベスター・モースは、1838年（天保9年）に、アメリカのメイン州のポートランドに生れた。普通教育を受けた後、土地の鉄道会社で製図員を経験した後、ハーバート大学で動物学者ルウィ＝アガツシイ（L. Agassiz）のもとで動物学を学んだ。

明治10年（1877）6月17日に、動物学研究のため来日した。数日後、横浜から東京に向かう途中で、汽車の中から貝塚の遺構を発見し、後に「大森貝塚」と名付けられた。モースは、メイン州やマサチューセッツ州にて貝塚発掘を行っていたことも、この発見に影響を与えたとされる。

同年、東京帝国大学に理学部が設けられ生物学科が設置された。モースに対して講師の依頼があり、9月から講義が始まった。その後、植物学者の助手の松村任三及び松浦佐用彦、佐々木忠次郎を引率し、線路沿いから眺めた遺構を訪れ、10月・11月に随時発掘を実施した。

モースは、動物学者の枠を超えて視野の広い学究を進めた。陶器などの日本の工芸品にも強い関心を抱き、陶器収集に傾注していたことで知られている。貝塚発掘の際にも、貝類の採取に留まらず、土器・石器等の出土品の発掘にも力を注いだ。『東京日々新聞』には、大森貝塚の発掘成果について、「地下凡そ一間程の所に至て、太古人民の品類甕瓶瓦片食器等を夥しく掘出したり」（斎藤忠『日本考古学史』からの転載）と示されており、この出土遺物の発見が、モースが国内での出土土器並びに陶器類への関心の高まりを促した可能性も示唆される。

同年10月13日、モースは、横浜の日本アジア協会にて、「日本先住民の証跡」という題目の講演を行った。翌年の明治11年には、家族を伴い再来日し、6月2日には東京帝国大学において古物愛好者に対する「大森貝塚」の講演を実施した。この講演では、旧石器時代・石器時代・青銅時代・鉄時代の各時代についての説明を加えて、聴講者に対して考古学の新しい知識を与える画期的な機会となった。

識見の広さの中で、モースが重要視したことの一つが調査や知識の記録保存に努めた点にある。特に大森貝塚の発掘に関する成果を報告書として情報を整理し刊行したことにより、遺構の発掘調査における見地の記録化が肝要である点が周知されるようになった。明治12年、上記報告書は、「東京大学法理文学部理科会輯第一帙」として英文として編集されている。報告書に含まれる石版刷りの附図については、土器・石器・骨角器・貝類等の出土品が仔細に描写されており、現物を明らかにする筆記資料としても高い評価を得ている。日本における考古学に関わる編集報告書としては、本邦最初の刊行物であり、考古学の報告書の基準書として認識されるとともに、貝塚研究ならびに国内縄文時代研究に対する寄与は大きいと言える。

モースは、明治18年に『日本の住居及び其の環境』（邦訳『日本のすまい・内と外』（Japanese Homes and Their Surroundings 1885）という著作を刊行している。国内での行程の際に目にした施設や住居内の様子を描き、その概要について解説したものであり、当時の家屋や人々の生業を知る上でも貴重な文献資料となっている。ここでは熊谷の根岸家主屋についても紹介されており、モース来訪時の建造物視察の様子が分かる。

また、『Japan day by day』は、モースが日本に滞在した2年間で見聞したことを777編におよぶモース自筆のスケッチとともに記載したもので、上・下2巻組で1917年にリバーサイド印刷（The Riverside Press）より発刊された。当時、英語で日本を紹介した書物としては卓越した評価を受けた書物であり、現在でも明治時代初期の生活文化をはじめとする日本の様子を知るための重要な資料である。

E.S.モース年譜（：「共同研究モースと日本」より 1988年7月 小学館発行）

1838年6月18日	アメリカ合衆国メイン州ポートランドで生まれる。
1859年11月	ハーバード大学ルイ・アガシー (Louis Agassiz) 教授の学生助手となる。(～1861)
1863年6月18日	エレン (Elen Elizabeth Owen) と結婚。
1867年3月	モースを含むアガシーの弟子4人で「American naturalist」を創刊。
5月	アガシー門下とピーボディー科学アカデミー (現 Peabody Museum of Salem) を創設し、学芸員 (軟体動物担当) となる。(～1870)
1871年	ボードイン大学教授 (～1874)。
1872年	ハーバード大学で講義 (～1873)。
1876年	アメリカ科学振興協会 (AAAS) 副会長となる。
1877 (明治10年) 6月～11月	第1回来日
1877年6月19日	汽車で横浜から東京へ移動の途中、大森付近で貝塚を発見する。(「大森貝塚」の発見)
7月12日	東京大学教授 (初代動物学教授) となる。(2年間の契約で月俸は350円。)
9月12日	東大で最初の講義を行う。
9月16日	「大森貝塚」の発掘調査開始。(1878年3月の発掘終了まで3次にわたり実施。)
1878 (明治11年) 4月～ 1879 (明治12年) 9月	第2回来日 (明治12年8月 根岸家へ来訪、同、熊谷の石上寺で講演)
1878年秋	日本陶器の収集を始め、蜷川式胤に師事する。
1879年1月5日	東京大学生物学会で「大森貝塚人食人説」を述べる。
1879年3月～4月	東大で「動物変遷論」連続9講を講義する。
1879年秋	"Shell mounds of Omori" を出版。翻訳「大森介墟古物編」は1879年末頃に出版。
1880年7月3日	ピーボディー科学アカデミー館長となる。
1882 (明治15年) 6月～ 1883 (明治16年) 2月	第3回来日 (明治15年11月 根岸家へ来訪)
1886年 (明治19)	"Japanese homes and their surroundings" を出版。AAAS 会長に選出される。
1887,88,89年	渡欧し、ヨーロッパに流出した日本陶器の研究と収集を行う。
1890年	収集した日本陶器コレクションをボストン美術館に売却。同館の日本陶器管理人を兼ねる。
1901年 (明治34年)	"Catalogue of the Morse Collection of Japanese pottery" を出版。
1902年 (明治35年)	"Observations on living Brachiopoda" を発表。
1917年 (大正6年)	モース滞日中の記録 "Japan day by day" を出版。
1923年 (大正12年)	関東大震災で東大図書館の壊滅を知り、遺言で全蔵書を東大に寄贈。
1925年12月20日	セーラムで逝去。(87歳)

モースの来村と根岸武香

モースの来村

黒岩横穴墓の発掘から2年後の明治12年(1879)の8月に、エドワード・S・モースは根岸家のある青山村に来村した。その様子について、『日本その日その日 (Japan day by day)』には次のように示されている。「八月六日、午後ドクター・ビゲロウと私とは竹中を通弁として伴い、東京から四～五十マイル先の青山に根岸(武香)氏を訪問し、彼の住居に近い或種の洞窟(黒岩横穴墓群)を見るために東京を出発した。その夜我々は小村白子(現在の和光市)で送った。」(上掲、135-136頁)

これによると、8月6日に東京を出発し、途中で川越に立ち寄り、8月8日には根岸宅に滞在したことになる。ただし、警察への滞在許可の願い(右資料、以下、『大里村史』165頁)には、8月11日に一泊したことが示されている。モースの外国人旅行免状における8月10日の旅行許可の日付を踏まえると、標記における滞在の日付は、モースの誤謬だった可能性がある。

この同伴した「ドクター・ビゲロウ」が、ウィリアム・スタージス・ビゲロー (Bigelow, William Sturgis 1850-1926) であり、モースの講演を聞いて日本に興味を持ち、来日した。1882年には、フェノロサとともに来日、岡倉天心を援助した人物として知られている。日本美術の収集家として日本美術の保存にも寄与したとされ、帰国後の1890年ボストン美術館理事に就任し、収集品の研究を続けた。

モースとビゲローの青山村への来村に際して、ビゲローから根岸武香に手渡された名刺が、本資料として認められるものである。その際、モースからの名刺の手渡しがあったことが推察されるが、人名録に残されているモースの名刺については、文面に「Director of the Peabody Academy of Science Salem, Massachusetts」(ピーボディー科学アカデミー館長)と記されている。モースが館長となるのは、この来訪の翌年の1880年であることから、モースの名刺については直筆画を残した明治15年(1882)に手渡されたものであることが推定される。

モースは、根岸宅に滞在中、黒岩横穴墓群を見学したことが、『日本その日その日』に示されている。これによると、モースは根岸に案内されて、「黒岩の洞窟」を踏査した一行の様子が詳細に紹介されている。横穴に関するモースの見解等は記されていない。モースは、青山村への来村の目的は洞窟への視察にあった。

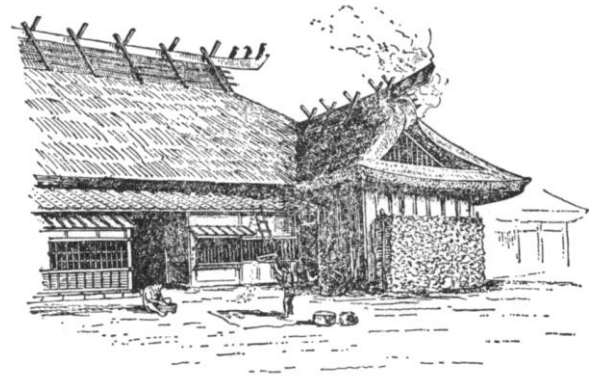
根岸も「某東洋日本ニ在テ君ノ芳名ヲ聞キ徳義ヲ慕ウヤ久矣 何ゾ凶ラン今ヤ大里横見郡村ニ在ル太古人民ノ穴居セン石窟ヲ探クルノ際、恰モ我カ居即チ三百年前ニ建築セル茅屋ニ来遊セラル榮ヲ蒙ルヲ得タリ (あなたのお名前を東洋日本島上で耳にし始めてから長いことになりますが、私はあなたが武蔵国大里郡と横見郡との間にある洞窟を調べに来られるとは思ってはいませんでした。また300年前に建てられた私の小屋にあなたを迎えるのが光栄でありました)」(上掲『日本その日その日』137-138頁)との歓迎の意が同書に加えられている。

加えて、モースは熊谷町にも足跡を残している。明治12年8月13日、埼玉県の熊谷で、モースを招いて講演会が開かれた。モースは持論の進化論について解説を進めたが、発起人の一人が、「人間の始めが猿という彼は不都合な人物である」として退席したとされている。(林有章「熊谷最初の講演会と外人の講演」『埼玉史談』)。考古学及び動物学の先進的な学問の教示に対して、当時の日本人の反応が分かる興味深い逸話である。

明治15年(1882)10月にも、モースは根岸宅を訪問している。現在根岸家に伝えられているモースの水彩画は、この際にモースによって記されたものであると推察される。この際の渡航記録については定かではないが、年譜に示される第3回目の来日時に再び青山村を訪れたことが分かる。

明治十二年八月十一日	大里郡青山村	根岸武香
筆生	稲村言真	
一泊為致候ニ付旅行免状写相添此段御届申上候也		
夜		
右者友人之処今般群馬県下ニ通行致シ候ニ付自宅〇今十一日		
御届	米利亞	モース氏

なお、根岸家の主屋に関しては、Edward Sylvester Morse が 1886 年に公表した、「Japanese Homes and Their Surroundings」(『日本人の住まい』)にも記されている。そこでは、次の説明が加えられている。「館は高塀によって表通りから隔絶された、数棟の建物からなるものであった。重々しい感じの門を抜けて入ると広い庭がある。この庭に面して低い平屋建ての長い建物があり、倉庫や使用人の起居するところとなっている。この庭の一番奥の門から見て正面の位置に、住み心地の良さそうな古びた主屋があり、屋根は草葺であった。」これらの記述は当時の根岸家敷地内の建造物の状況を明らかにする資料である。



: 根岸家主屋描写 (明治 11 年)『日本人の住まい』81 頁より

根岸武香の人物像

根岸武香は、天保 10 年 (1839) 5 月 15 日、大里郡吉見村青山の地に、根岸友山の二男に生れた。父と同じく文武両道に秀で、少年の頃より勉学を志して江戸に出向した。武術を千葉周作の道場に習い、また国学を平田鉄胤や横山由清に学び、和歌は小林歌城や安藤野雁に師事した。また儒学を三餘堂に逗留した寺門静軒から学んだ。特に和漢の学の特筆すべき能力を発揮し、その関心は考古学や史学への研究に繋がることになった。父友山に力を合わせて皇道の復興につくし、青山神社の再建等にも尽力した。嘉永 3 年 (1850)、伴七と称して、村名主役を勤め、父と共に河川改修や治水に政治的才能を発揮した。

また学問的な進展も目覚ましく、考古学への造詣が深く、出土遺物を蒐集保存することに傾注した。古器物の鑑定に長じて、吉見百穴の保存を進めるとともに、その発掘に協力した。この考古学に対しての功績は顕著であり、黎明期の学術的基礎を形成した意義は極めて大きいと言える。また著作物として、皇国古印譜 5 巻、皇朝泉貨志 1 巻を出版し、明治 17 年には先に江戸幕府が編纂した『新篇武蔵国風土記稿』80 冊を出版印行した。

武香は、「吉見百穴」発掘後に、その保存を要望する「意見上申書」を宮内庁に提出している。そこには、「一又外人ニハ、ヘンリー・ホン・シーボルト氏及ヒエドワード・エス・モース氏等来観アリテ或ハ草昧時世ノ民居ノ跡ナリトシ、或ハ埋葬ノ壙ナリト云ウ、各説一定セス」と記されている。

明治 10 年 (1877)、「吉見百穴」から数キロ北方の斜面に位置する「黒岩横穴墓群」の発掘が行われた。この発掘は大里出身の名士が中心となって実施され、16 基の横穴墓を確認するなどの成果が得られた。その調査には、武香の他、郷土史の資料として評価される見聞録『桐窓夜話』を著した須藤開邦の姿があった。モースの登場と、地域の若き考好家の探究により、熊谷地域の学術文化の揺籃期が確立されたと言える。

《参考文献・出典資料》

- ・ E・S・モース『日本その日その日・1』石川欣一訳 東洋文庫 171 1970 平凡社
- ・ E・S・モース『日本その日その日・2』石川欣一訳 東洋文庫 172 1970 平凡社
- ・ E・S・モース『日本その日その日・3』石川欣一訳 東洋文庫 179 1970 平凡社
- ・ E・S・モース『日本のすまい』上田篤・加藤晃規ほか訳 1979 八坂書房
- ・ 『共同研究 モースと日本』守屋毅 編 1988 小学館
- ・ D・G・ウェイマン著 『エドワード・シルベスター・モース』蜷川親正訳 1976 中央公論美術出版
- ・ 『モース・コレクション』国立民族学博物館 1990 小学館
- ・ 品川区立品川歴史館 『開館記念特別展 モース博士と大森貝塚特別展示図録』1985
- ・ 磯野直秀『モースその日その日—ある御雇教師と近代日本—』1987 有隣堂
- ・ 東京都大田区立郷土博物館『私たちのモース—日本を愛した大森貝塚の父』1990
- ・ 『大里村史—通史編』大里村史編さん委員会 1989
- ・ 斎藤忠『日本考古学史』吉川弘文館 1974
- ・ 『特別展 根岸友山・武香の軌跡』大里村教育委員会 2002
- ・ 根岸友山・武香顕彰会編『根岸友山・武香の軌跡—幕末維新から明治へ』2006
- ・ 『熊谷市指定文化財「根岸家長屋門」保存修理工事報告書』熊谷市教育委員会 2012
- ・ 『根岸友山・武香顕彰会創立十周年記念誌』同顕彰会 2012

著者:

熊谷市立江南文化財センター 山下祐樹

(KUMAGAYA City KONAN Cultural Properties Center Yuki YAMASHITA)

調査研究報告 4

E・S・モース関連資料と根岸家

根岸家における **E・S・モース**関連資料と学術的交流に関する考察

2016年4月12日発行

発行：熊谷市文化遺産保存事業実行委員会・文化遺産研究会

事務局：熊谷市立江南文化財センター内

(埼玉県熊谷市千代 329)